

『白い鶴よ、翼を貸しておくれ』

2021年01月11日

チベットは高い山々に囲まれた「秘境の国」と言われている。一方、熱心な仏教国で、「ダライ・ラマ」や「マニ車」、「五体投地」など、また最近では、中国に支配され、差別と抑圧に苦しんでいると聞かされている。しかし、詳細な実情は伝えられていない。

チベット人の医者ツェワン・イシェ・ペンバ氏が英文で書いた『白い鶴よ、翼を貸しておくれ チベットの愛と戦いの物語』が、星泉氏翻訳により、書肆侃侃房から出版されている。単行本500頁を超える大部の本で、チベット、インド、アメリカにまたがる壮大な小説である。小説ではあるが、歴史上の出来事を踏まえており、チベットを身近に知らされた。何より、登場する人物の個性に圧倒され、時間を忘れ、読み進んだ。

20代の若き米人宣教師夫妻が宣教の使命に燃えて、チベットの「前人未踏の地」と言われたニャロンに入る。「チベットの人々にはどうしても神の御言葉を聞いてほしいのです！ そうすればみな救済されるでしょう。そして解放されるのです。すべてのチベットの人びとが解放されるでしょう」との意気込みであった。チベットの人々は「どうぞ布教活動をして、神の御言葉を広めてください。…どの宗教を信じるかは人びと次第です。信仰のための祭壇は果てしなく広いのです。我々は無限と呼んでいます。別の神のための場所はいつだって存在するのです」と大らかに受け入れてくれた。仏教とキリスト教は文化的遭遇はしたが、篤い仏教信仰に生きるチベット人にはキリスト教の宣教は一向に届かない。しかし、宣教師夫妻の献身的な医療活動によって、人々から信頼を得、人間的な交わりは深まっていく。宣教師の妻がニャロンの領主の妻の次男出産を手助けし、テンパが生まれる。一方、宣教師夫妻に長男ポールが生まれる。テンパとポールは幼い時から、山と谷を駆け巡り、野性的で、約束を守る律義さと臆病を恥とする勇敢な青年に成長し、深い友情で結ばれていく。ニャロンにおける家同士の怨恨が引き起こす復讐劇が登場する。チベット人は宗教には寛容だが、生活と誇りに関しては、他家を絶滅させるほどの残酷な殺害をすることに驚いてしまったが、小説のメイン・テーマは中国共産党のチベット侵略である。

人民解放軍は米宣教師を帝国主義の手先だと見なし、宣教師夫妻は殺害される危険があるので米軍機で帰国する。息子のポールはニャロンで育ったチベット人だからと残る。解放軍は「侵略を企てた清朝軍とも、無法な国民党とも違い、チベットを帝国主義と農奴制から解放する偉大な祖国・中国に迎え入れるために来た中国人である」と宣伝する。しかし、毛沢東思想に席捲された「新宗教」であった。解放軍はチベットの民衆に支持された僧侶と対話したが、経文を読み、祈祷するだけで、労働しない無用者と断じる。僧院は、過去の侵略経験から武器、僧兵を擁していたが、解放軍の圧倒的な火力によって、数千人の僧侶たちが殺害される。人々は戦闘を逃れて、国外逃亡を図る。テンパとポールたちは仲間と共に山に籠り、熱いゲリラ戦を展開する。これも圧倒的な火力によって、蹴散らされる。これらの悲惨な戦いは歴史的事実を踏まえての記述である。ポールは米国の支援を求め帰国するが、それが得られず、チベットに戻るというところで、小説は終わっている。

著者ペンバ氏の長女ラモ・ペンバ氏は「この作品は様々な民族・宗教が対立し、東洋と西洋の文化がぶつかり合うさまを描いています。人間が生み出した民族や言語というものがどれほど重要であろうと、それをはるかに超えて重要なのは人間であり、人間こそが中心にあるのだ、ということが主題なのです」と語っている。ペンバ氏はチベットにアイデンティティを持ち、チベットが経験した悲劇を綴っている。彼のチベットへの深い愛と、チベットの現実を世界に伝えたい強い意志を受け止めながら、私は読んだ。